

「誘惑を見極めるには」

ヨシュア9：3～23
ヘブル11：1～3

「愛」という言葉

皆さんは「愛される」「愛している」という言葉を聞く時どのように感じていますか？

私たちは、よく自分を見失ってしまいますが、「愛」という言葉は、自分を見つめ直すことのできる言葉です。

誰かから、愛し必要とされている事を感じる時、「自分がどう進んでいくべきなのか？」「どう歩むべきなのか？」をもう一度感じる事ができる言葉なのではないでしょうか？

そして、「愛している」という言葉で私たちが戻る事ができたように、「愛」とは反対の言葉が投げかけられる事も多くあります。私達の心のうちに語られる偽りの言葉は、正しい言葉よりもよっぽど多いのです。誰かが何気なく発した言葉は、多くの場合人によって変換されてしまいます。人の伝えた言葉の意図は、その人にしかわかりませんが、相手に伝わる時には全く別のものとして伝わる事がよくあります。このように言葉には、多くの背景とニュアンスがあるため、伝えるのがとても難しいものです。そして、その言葉で自分なりの判断をし、決断してしまうため危険であり、語るのも聞くのも注意しなければなりません。

言葉は危険なものである

神様が最初に人間に言葉を与えた時、『言葉は神であった』私自身であると言ったため、とても影響を及ぼすものとなりました。ですから、私たちが発する言葉も、聞く言葉も大きな影響を与えることを知っておかななくてはなりません。「変遷」と「変貌」を遂げる為には、正しい言葉を受け取り、理解しなければなりません。多くの人は「変遷」と「変貌」を遂げたいと考えているが、戻ってしまいます。変わろうとする時には、それを妨害しようとする力が半端でないからです。イスラエルの民も、エジプトにいる時にはこんなところ嫌だと言っていました。そこから出てエジプトの方が良かったと言い出しました。嫌だと思っていたものも、それがなくなると人間は元に戻ろうとします。しかしそこに戻ってしまうと、また同じことを繰り返してしまいます。私たちは、昔、した決断を忘れてしまうため、同じ事を繰り返してしまうのです。そして私たちは、「変遷」「変貌」を遂げる為、もう戻らない決断をする為に聖書のストーリーを学んでいます。

横田早紀江さんは

横田さんは娘を北朝鮮に拉致され、40年以上会う事ができていませんが、金正恩の事を恨むと言う選択をせず「金正恩さん」と呼び、北朝鮮を愛して祈っておられます。彼女が憎んでいるのは、彼らではなく、人にその様なことをさせてしまう悪だとして、我が子を捧げる神様の様な生き方をされています。感情をコントロールし選ぶべきものをしっかりと選んで生きておられる横田さんは自分の願いからぶれません。私たちは、感情をコントロールし誘惑に乗らないことが大切です。私たちはこの願いを取り違えていないでしょうか？

本日の聖書から

ヨシュア記9章3節～23節はヨシュアが騙されてしまったストーリーになります。ヨシュアがエリコとアイに対してやった事を見て、ギブオン人たちはヨシュアの率いるイスラエルの民と停戦協定を結ぼうとしてきました。彼らは400年にわたって罪を犯し続けていた為、本来聖絶されるべき民族でした。しかし、アイのようになるぐらいなら奴隷になっても構わないから助かりたいと思い、服をボロボロヨレヨレにし、パンも葡萄酒の皮袋も古びさせてやってきて「私たちは遠い国からやってきました。ですから、私たちと盟約を結んでください」と言って近づいてきました。イスラエル人は、彼らに「あなたたちは、私達の中に住んでいるんだろ？」となんとなくわかっていましたが、信じてしまいました。この見破ることができなかったヨシュアたちが、問題となってしまいました。人は、なんとなく正しい事がわかっているのにそれを選ばない時があります。それが危険です。

今日学ぶことは、人生の道を神様と共に歩んでいく中で危険なことは誘惑だと言うことです。神様は、私達の人生を変える事ができますが、それを無理やりすることはできません。

イスラエルの民のズレ

ギブオン人の事は、近くから来た者だとなんとなくわかっていたが、契約してから、「やはり彼らは近くに住んでいた者で、本来は敵だった」とわかったが、契約した手前、神様に怒られるのは嫌だから生かしておこうと言い出しました。私達の判断がずれているため、ヨシュア記の一章を使って私たちに神様は語られました。私たちは、わかっていることを行わなくてはなりません。ヨシュアは名英雄であり、世世にわたって祝福されましたが、彼らがしている決断より、ギブオン人たちのように命ギリギリで助けを求めている決断の方が正しいのではないのでしょうか？

死というのは、自分の人生の生き方をしっかり考えることのできるチャンスです。ギブオン人も遊女ラハバも死を目の前にし、このままで良いのかと考えました。目の前に置かれたものが苦役であっても、自分の生き方と今後を考えたい時に正しい決断をできる事が必要です。神様が今日私たちに伝えようとしていることは「間違うな」「騙されるな」ということです。「神様の声だと思って間違うな」と語られていますから、先のことを知っている神様の声を聞き誘惑を見極めたいいただく必要があります。

稲盛和夫氏の生き方

京セラの創設者であり、JALの経営を立て直したことで有名な経営者。彼がクリスチャンだったかどうかは定かではない。しかし彼は「人はパンのみにて生きるにあらず。神の口より出づるすべての言葉によって生きるのである」という聖書の言葉に出会い実践した人物でした。また稲盛氏の代表的な経営哲学の中に「利己心と利他心」という考えがあります。

【「自分だけよければいい」という利己的で邪な心になるべく抑え、思いやりに溢れた美しい利他の心が自分の心の大部分を占めるように、心の庭を手入れしなければなりません】

つまり、どの人の心の中にも、利己と利他の二つの心が同居し、存在しており、そのどちらの心が自分の心の中で大きな割合を占めるのか、ということが大切になってきます。この同居し、せめぎ合う人間の二つの心ということで稲盛氏はノーベル文学賞を受賞した、インドのタゴールという有名な詩人から以下の詩を引用しています。

私はただ一人、神様のもとにやってきました。しかし、そこにはもう一人の私がありました。その暗闇にいる私は、一体だれなのでしょう。私はこの人を避けようとして、脇道にそれますが、彼から逃れることはできません。彼は大道を練り歩きながら、地面から砂塵をまきあげ、私が慎まじやかにさきやいたことを大声で復唱します。彼は私の心の卑小なる我、つまりエゴなのです。主よ、彼は恥を知りません。しかし、私自身は恥じ入ります。

このような卑小なる私を伴って、あなたの扉の前に来ることを彼はこの詩の中で、利他的な、優しい思いやりに満ちた心を持った自分と、薄汚く、意地悪で、すぐに怒ったりする、自分だけよければいいという強欲な心を持ったもう一人の自分とが同居しているということ、うまく表現しています。私自身はできるだけ美しい心で生きたいと思っているのに、薄汚いもう一人の私が自分から離れようとせず、どこまでもついてくる。これは自分の心の中に同居しているわけですから、離れていくわけがありません。そのことを神様の前で恥じていると言っているのです。

稲盛氏は、こういった思想を学んでは実践し自らの哲学を追求し、多くの人にその生きざまを通して影響を与えたのでした。彼は大切なことを聞き、実行したので。私たちはクリスチャンであり、素晴らしい福音を聞いています。なのに、なぜ？良いこと・正しいことを実践せず、捉われてはいけないことに捉われててはいけないことばかりしてしまうのでしょうか。福音を実践するものになっていきましょう。

神に聴かない習慣

神に聴かない習慣、偽りの声を「見分ける力」と「改める決断」の2つが必要だと神様は語られています。

創世記、出エジプト記、ヨシュア記を今まで学んできて、人々が失敗してきたのを見ると、原因は神様に聞かないからです。アブラハムもダビデ王も誘惑を受けました。しかし、誘惑を受けた後どう行動するかが重要です。ダビデ王は誘惑を受け失敗した後、素直に「ごめんなさい」と言ってもう一度聞き直しましたが、サウル王は神様の前に出ることはありませんでした。神に聴かない習慣がサウル王にありました。

私たちも人の言葉に影響を受ける事があるかもしれませんが、夜寝るとき、神様と正しく向き合うか、私たちを騙すものと語るのかであれば、私達の歩むべき道を知っておられる神様に聞き従いましょう。

最後に

私たちは、相応しくない行いに進みやすいものです。天国に帰った時に、自分の生き方を恥じることもできますが、今生き方を変えることもできます。私達の生き方は間違っていますし、自分の弱さに負ける決断を行なってしまいます。間違っても構わないから、私の前に戻ってきなさいと神様は語っておられます。

決断は私たちがしますが、それを祝福し奇跡をもたらすのは神様です。良い種を自分の心に蒔きたいと願い、神様と共に歩む決断をしていきましょう。

(要約者：辻 総一郎)

(2024年11月17日)